

転生



の

刻

風兎 不弑王

「おはよう……」

覗き込む俺の顔がコールドカプセルの表面に映って、その中に横たわり固く目を閉じる顔と重なった。

思わず視線を逸らし、軽く首を左右に振る。

「別にこうなる事を望んでいたわけじゃない……」

五年前に世界政府が採択した苦渋の決断。それが全てだった。

ともかく、手術とリハビリの為の二週間の公休は昨日で終わったのだ。今日からは会社に行かねばならない。まだ身体に少し違和感が残るが、動いていればそれも薄れていくだろう。全ては慣れだ。

「ナディア、用意を頼む」

「はい、旦那様」

今や、先進国の家庭には必ず存在するであろうメイドタイプの汎用アンドロイド。それを俺はナディアと名付けていた。

ナディアの容姿は、二十代半ばのごく普通の白人女性がモデルだ。肩までの長さの栗色の髪とブラウンの瞳を持つが、飛び抜けた美人でもなく、醜いわけでもない。際立った特徴も無く垢抜けはしないが、なんとなく親しみやすい印象を与える。

そのナディアが自宅のセキュリティを始めとして、家事の一切をこなしてくれる。朝の準備も、俺はただ椅子に腰掛けて待っていればいだけだった。

「服や靴は大丈夫かな？」

「大丈夫です。新しい身体のサイズに全てピッタリと合わせてあります。お食事が終わりましたら用意致します」

「ああ、そう……」

俺はあらためてマジマジと、自分の身体を見回した。

統計的に、最も人間の感性が美しいと感じる体型と肌の色……、それがサイバーバイオテック社の新製品の謳い文句だった。

創られた新しい身体は、病気になる事など全く無いという。



「旦那様、朝食の用意が整いました」

「ああ、さっそく頼むよ。今日は上司に報告も有るから、急がなきゃ」

「承知しました」

ナディアの返事と同時に、脇から自動でワゴンが近づいて来る。真横に音も無く収まると、その上部から透明なチューブが伸びて、俺の喉元にジョイントされた。

チューブの中を黒いドロリとした液体が昇って、俺の体内へと流れ込んで来る。

「脳細胞の維持に必要な必須アミノ酸を含むタンパク質、ブドウ糖、ビタミン、ミネラル、水分等から出来たペーストです」

ナディアが朝食の内容について詳しく説明してくれるが、それは食事と言うにはあまりに寂しい動作であり、十秒にも満たないセレモニーだった。

チューブが外された俺の喉元を、ワゴンから伸びた触手がガーゼで器用に拭き取り消毒をする。手際の良い一連の流れ作業。そうだ……、これは作業だ。食事なんかじゃない！

やりきれない惨めな気持ちが、特殊強化樹脂で出来ている胸郭に充満していく。

悲観的な思考のループにストップをかけたのは、壁に埋め込まれたモニター画面から響く、柔らかく短い連続した電子音だった。

「ウォルター部長からテレビ電話です。繋がりますか？」

「ああ、繋いでくれ」

画面を覆うカーテンがスルスルと左右に退いて行くと、モニターには俺の上司、ウォルター部長の姿が浮かび上がった。

「おはよう、ジョン」

「お早うございます、ウォルター部長」

「なかなか見た目、いいじゃないか。どうだい、新しい身体の調子は？」

「……まあまあです」

「そうか。シナプスの浸潤が馴染むまでは多少違和感が有るかもしれんが、いずれ慣れるよ」

「そう願っています」

「我が社では君が最後の転生者だ。転生した後に、精神的に耐えきれなくなって自殺を試みた者が、今までに何人も居る。皆、人間としての尊厳の喪失に苦しんだんだ。あまりシリアスに考え過ぎるのは良くないぞ」

人間としての尊厳の喪失……。

その通りだ。はたしてこれで人間と言えるのか？

「ゼノバ・ウイルスの研究が進んで、治療薬やワクチンが開発されるまでの辛抱だ。その時にはまた自分のオリジナルの身体に戻れる。楽天的に考えろ」

ゼノバ・ウイルス……。口に出すのもはばかり程、我々人類に大打撃を与えた恐ろしく禍々しい、その名前。

あれは七年前、俺がまだカレッジに入ったばかりの頃だった。こいつが突如現れ、人類を襲い始めたのだ。

最初、ヨーロッパに現れたそれは、驚く程の早さで感染域を広め、瞬く間にアメリカ本土に上陸した。わずか一年の間に死者は六千万人にのぼり、二年目には南極大陸を除く世界の五大陸に蔓延、死者は二億人を突破し、更に加速度的にその犠牲者の数は増え続けていった。

まったく新しいタイプのウイルスだった為に、いっこうに対抗手段を見つけられない研究機関。学者達の予測結果は悲観的で無慈悲なものだった。それは紛れも無い現実であり、我々人類は絶望の淵へと追い込まれた。

六年以内の人類の絶滅……。

人々は理性を失い、ある者は新興宗教にはしり、ある者は犯罪の限りをつくし始めた。

治安維持の為に軍隊が出動し、狂気に取り憑かれた同胞を銃で撃ち殺す。流された仲間の赤い血で更に共起し、無法の限りをつくす暴徒たち。

阿鼻叫喚の様相を世界各地のニュース画像で日常茶飯事に見かけるようになった頃、ある企業が黒雲の下でうずくまる人類に一筋の光りを投げかけた。

〈サイバーバイオテック社〉

ドイツの製薬会社の資本が入ったアメリカのベンチャー企業、それが人類の命運を分ける重大な発表を行ったのだ。

〈人類転生計画〉

人間の脳をアンドロイドのボディに移植するというその奇想天外な提案は、世界各国で大きな波紋を呼んだ。

神に対する冒瀆、人権の蹂躪、生命を弄ぶ悪魔の行為……。

多くの熱心な宗教家や倫理家たちからは批判の嵐が次々と吹き荒れ、サイバーバイオテック社には、投石や放火が相次いだ。そして、ついには自爆テロ事件まで起きてしまう。

しかし、ゼノバ・ウイルスが猛威を振るい始めて三年目に入ろうかという頃、状況は一変した。

とうとう四億人を越えた犠牲者にたまりかね、世界政府が重い腰を上げたのだ。それは軍事力を伴った強権の発動であり、従わない者は最終的に命を奪われる事となった。

依然として有効性を認められない治療薬の開発に痺れをきらし、世界政府は人類転生計画を採択した。それは人類の滅亡を阻止する為の、苦渋の決断だった。

人類転生計画に反対する多くの者が地下に潜りレジスタンスとなって抗った。彼らにより、アメリカの大統領を始め、数人の世界の首脳が暗殺されたが、皮肉な事に、病の刃は情け容赦無く彼らの身体をも蝕んでいった。

やがてゼノバ・ウイルスによって各地のレジスタンスは肅正され、消滅していった。

ゼノバ・ウイルス発生から七年目の現在、八十五億人だった世界の人口は激減し、二十億人を切った。生き残ったのは、人類転生計画によりアンドロイドの身体をいち早く手に入れた人々と、運良く未だゼノバ・ウイルスに感染していない僅かな人々だった。

しかし、あと一年もすれば感染していない生身の人間はゼロになるだろう。俺もその残された僅かな人々の一人だったが、ついに見えない悪魔の牙はこの身を捉えてしまった。

通常、感染から潜伏期間を経て一週間で発症。その後二週間以内に絶命に至る。遅くとも発症から三、四日以内に転生の処置を済ませなければ、神経細胞が完全に破壊されて、来たるべき日の為に身体を冷凍保存しても意味が無くなってしまうのだ。

人類の存続という最後のチップを睹してゼノバ・ウイルスと戦う世界政府には、手段を選ぶ余裕などは無かった。その統制は個人の意思など許さぬ絶対的なもので、感染した者は即刻施設に強制連行され、粛々と機械的に処理された。

俺も感染が判明してから十分もしないうちに身柄を拘束され、そのまま施設へと連行された。家族や恋人と連絡を取る余地さえも無く、まるでそれは、世界の歴史において悪名高いアウシュヴィッツへの収監を思わせた。

やがて訪れる事と覚悟はしていたものの、いざ実際に起きてみると、自分というものが人類の運命という、とてつもなく強大な奔流に、なすがままに弄ばれる一枚の木の葉に過ぎなかった事を、まざまざと痛感させられたのだった。

気持ちの整理をする間も無く手術台に乗せられ、そのまま麻酔で意識を失った。次に俺が目にした物は、鏡の向こうから見つめ返す人工的な二枚目の姿だった。

DR7000シリーズの最新型。従来品の中で最も美形と言われるアンドロイドのボディ。それが今の俺の、新しい身体だ。オプションで体型も肌の色も、好みに変えられる。

皮肉な事だが、有る意味でゼノバ・ウイルスは人種間の差別を取り払ってくれたのかもしれない。

「ジョン、君にはまた私の下でしっかり働いてもらうよ。感傷になんか浸っている暇は与えないから、そのつもりでな」

ウォルター部長のふくよかな顔が微笑みの表情を作る。それは、やや人工的な不自然さを感じさせるものではあったが、その言葉も表情も、彼なりの気遣いである事は十分に理解出来た。

俺が三年前に入社した時には、すでにウォルター部長は転生によってアンドロイド体になっていた。彼は自らの身をもって、この苦悩の道のりを嫌という程、味わってきたのだ。明るくいたわる言葉にも、軽薄さという物は微塵も感じさせなかった。

涙を出す機能が無いので、視界が滲む事はなかったが、脳に刻み込まれた感傷の記憶が、特殊強化樹脂の胸の奥を熱くさせた。

「はい、ウォルター部長。今日からまたよろしくお願いします」

良き上司を持った事に感謝しつつ、テレビ電話を切る。

「旦那様、着替えの用意が整いました」

ナディアが持ってきたスーツに着替えると、新しい身体にピッタリとフィットした。

「ナディア、バッチリだよ、ありがとう」

「いえ、旦那様。喜んで頂けて嬉しいです」

ナディアの言葉と少しはにかんだ表情は、彼女の記憶装置の膨大なデータの中から、その時々に対応しいものを人工知能が選び作り出しているものだろう。

しかし、なぜか俺はそんな彼女に微笑み返していた。彼女に礼を言った事自体、初めてだったかもしれない。

今や人間とアンドロイドを区別するものは、頭脳、つまりは心に他ならない。

アンドロイドは罪を犯す事も争う事も知らない。プログラムされた人工知能とはいえ、人間に尽くし、それを喜びとして表現するのだ。

一方、人間はというと、アンドロイドの身体を持った今でさえ、相変わらず人を騙し、犯罪を犯し、争う事を止めない。

同じ身体を持った者として、一体どちらが美しい存在なのか……。

俺は、コールドカプセルの中を再び覗き込んだ。

凍り付いた、元の自分の身体が横たわっている。

はたして、この身体に戻れる日が来るのだろうか？

はたして、人間が人間らしく生き、その上でアンドロイドよりも美しいと、自信を持って言える日が来るのであろうか？

「ナディア、行って来るよ」

「行ってらっしゃいませ、旦那様。お気をつけて」

濁りの無い美しいブラウンの瞳が、俺の新たな旅立ちを見送った。